

常照

第857号

聖徳皇（しょうとくおう）の
おあわれみに

護持養育 たえずして

如来二種の回向（えこう）に
すすめいれしめ おわします

（皇太子聖徳奉讃）

【意識】 私たちは聖徳太子の憐（あわれ）みによって護られ、阿弥陀如来を信じるよう育てられ続けてきた。今、その働きが成就して、如来の往相（おうそう）回向と還相（げんそう）回向の救いを勧めていらっしやいます

聖徳太子 千四百回忌

去る令和三年二月二十二日、日本において仏教を弘められた聖徳太子の千四百回忌を迎え、千四百年を経た今でも誰もが知っている代表的な偉人であります。推古天皇即位後、摂政となった太子は釈尊が示された「仏（悟りを開いた人）・法（悟りを開いた人の教え）・僧（心の平安を実現する仲間）」の三宝（さんぼう）を興隆。また仏法の道（どう）・法家（ほうか）・儒教思想」を採り入れ、愛民治国の政治を行いました。後に「十七条憲法」を制定し、法隆寺の建立にも携わりました。太子は正に日本仏教の祖と言えるべき人物であります。

浄土真宗の宗祖である親鸞聖人も聖徳太子を篤く敬っておられました。人々に寄り添い、また迷いから救う

「救世觀世音菩薩（くぜかんぜおんぼさつ）」のようにお導き頂ける存在として、とても大切にされました。ですから浄土真宗のお寺の本堂には聖徳太子の絵像が掛けられてあるのです。

親鸞聖人が比叡山で修行をなさって十年が経過した若かりし頃、求道（ぐどう）に行き詰り、身分の貴賤を問わず平等を大切にしながら仏教を弘めた聖徳太子に解決の道を尋ねようと、太子の御廟（ごびょう）を参詣されました。そこで三日間、一心不乱に参詣し意識が朦朧（もうろう）（もうろう）として倒れた瞬間、御廟の扉が開き、光溢（あふ）れる中から太子が現れ聖人に語られたという言い伝えがあります。場所は、現在の大阪府南河内郡太子町で当時は磯長（しなが）村と称されていたことから、この出来事は「磯長の夢告（むこく）」と呼

ばれました。諸説はあるものの、夢告の内容は「二種の回向（えこう）」であったと伝えられています。

可哀そうに！

衆生（しゅじょう）、すなわち苦しみや悩みを抱えている私たちを、どこまでも護り育てる阿弥陀如来のはたらき、それを親鸞聖人は「護持養育」と著されました。年老いたから育つ必要がなくなつた訳ではなく、一生涯に渡り「育」は大切にされるべきものと考えられたのでしよう。

「哀れみ」は可哀そうに思う、不憫（ふびん）に思うという字義で、その成り立ちは口に衣、つまり同情の声を寄せ合うさまを表します。一方、「憐（あわ）れみ」は悲しむ、気の毒に思う他に、慈しむ、愛（め）でるという字義があり、その成り立ちは「隣」

に通じ、隣人同士が抱く心を表します。引用文では平仮名で著されていますが、聖人の意図は「憐」であつたと思われまゝ。「可哀そうに」という言葉は、上から目線の輕蔑した意味合い、つまり「この人に比べたら私はまだマシだ」という比較論で物を事を推し量つているように感じます。

往相回向と還相回向

浄土真宗における「回向（えこう）」とは、ご本尊である阿弥陀如来がその徳を人々に施して救うことを指します。つまり、ご本尊（本・当に尊いもの）に手を合わせる行為を通して、いわば私の心を映し出す鏡の前にいるように、自分がどんな生き方をしているかを振り返ること、それを言葉にしたのが「南無阿弥陀仏」です。先程の「二種の回向」とは、往相（お

うそう〓自身の物差しで推し量ることに振り回されるような人々と共に平等に浄土へ生まれたいと願う心）と還相（げんそう〓浄土に生まれて諸仏になった人が、そこで安樂な生活をする事なく、この世に還つてきて、煩惱に振り回されているような私たちを仏道に向かわせるよう教化（きょうけ）していくことであります。

春になると芽吹き花を咲かせるように、また冬になると極寒の凍てつく大地になるように、自然の道理というものがあります。それと同じように、お浄土に生まれた人は必ず娑婆に還つて、縁ある人々に浄土の莊嚴（しょうげん）（しょうごん〓成り立ちや様子、いわれなど）を示し、「願生（がんじょう）（ひこく）」、すなわち浄土に生まれたいと願う心を示すため

に還相回向があるのです。

私たちは極楽浄土に行くことばかりを考えがち、いや、元より命尽きればその肉体は単なる抜け殻と考えている方もおられます。けれども、「育」に視座を置くと、比較論で物事を推し量る人生よりも、人として悲しみ、気の毒に思う寄り添いの心に加え、相手を慈しみ、愛(め)であるという人と人との「育み」を、親鸞聖人は聖徳太子を通して私たちに語りかけているのではないのでしょうか。「命の尊厳に目を向ける」それが仏道であり平等の本質であると私は受け止めております。戦後八十年を迎えるにあたり、平和を希求することのみに留まらず、親鸞聖人や聖徳太子のお言葉にも耳を傾けて頂きたいと思えます。

六月の常例布教(ご法話)のご案内

○前期 六月七日(土)～十一日(水)

熊本教区 熊本西組 両嚴寺

講師 郡 浦 智 明 師

○後期 六月十三日(金)～十六日(月)

大阪教区 榎並組 信徳寺

講師 小 西 善 憲 師

○場所 小樽別院内

○時間 午後二時(法要終了後)～

午後三時半

浄土真宗のみ教えについて布教使にご法話を
して頂きます。どうぞお誘い合わせいただき、
ご聴聞に来院ください。席の間隔を保ち、換気
実施の上、お待ちしております。

発行所

☎047-0017

小樽市若松一丁目四番十七号
本願寺小樽別院

電話 (〇一三四) 二二一〇七四番
FAX (〇一三四) 二九一四〇八番
テレホン法話 二七一六番